



重建懷徳堂復元模型

大坂、懷徳堂メモリー

江戸時代の中期、八代将軍吉宗の頃。
大坂にはすでに身分の区別のない大坂町人による町人のための学校「懷徳堂」がありました。
江戸とはどこか異なる大坂文化。
どうして江戸ではなく大坂に生まれたのか、大阪大学の精神的な源流「懷徳堂」を知ると、
大阪が誇らしく思えるかもしれません。

懷徳堂

から「大坂」を知る

湯浅邦弘（文学研究科教授）

市民による市民のための学校 「懷徳堂」

平成27年（2015）秋、サッカーJ1ガンバ大阪の新スタジアムが完成しました。阪大吹田キャンパスからもほど近い場所。驚くのは、この建設資金の大半が、寄付によっていることです。もちろん一部助成金も含まれますが、法人と個人の寄付は、実に100億円を超えたといえます。3,000億円を上回る建設費が問題となり、白紙撤回された新国立競技場案に比べると、安価な建設費とコンパクトな設計で国際基準を満たす素晴らしいスタジアムができたようです。

このように、国の力を頼ることなく、本当に意味あるものは、自分たちで作ってしまおうというのが、大阪人の気質です。そして、こうした市民の気概は、江戸時代にまでさかのぼるのです。

享保9年（1724）、今の地下鉄淀屋橋付近、今橋の地に、懷徳堂という学問所ができました。大坂の有力町人が出資し、また学舎を提供して設立されたものです。

当時は、徳川八代将軍吉宗の頃。まだ学校と言えば、江戸の昌平坂学問所や有力藩の藩校があるくらいでした。それらは武士の学校で、市民の学びの場ではなかったのです。そうした時に大坂では、市民が市民のための学校を作っていました。しかも、そこで講じられたのは、決してビジネスの話ではありません。商業活動の基盤となる倫理道徳を、中国の古典、たとえ

ば『論語』や『孟子』などによって学ぼうとしたのです。学校名の「懷徳」も、「君子は徳を懷う」という『論語』の言葉にちなむとされています。

杓子定規じゃない道徳論 身分の区別がない先進性

懷徳堂に招かれた学者たちも、ユニークでした。初代学主（学長）の三宅石庵という漢学者は、中国の古典を講義しながら、「義」と「利」の関係を説きました。正義に基づく行為には、必ずあとから利益がついてくる、と。それまで、義と利とは相反するものだと考えられていました。正義を追求すればお金儲けには縁がなく、逆に、利益の追求に走れば正義を逸脱してしまう、と。ところが、懷徳堂の先生たちは、そうした杓子定規なことを言わず、柔軟な道徳論を説いたのです。これは、大坂の町人たちを大いに励ましたことでしょう。

その学則も先端的なものでした。士農工商という厳格な身分制度がある中で、懷徳堂では、武士も町人も、学生としては「同輩」だと規定しました。画期的なことです。席次も緩やかで、受講生たちがお互いに譲り合って決めていたようです。さらに、学費も安価で、商用による早退も認められていました。だからと言って、ルーズな学校だったのではありません。懷徳堂からは、その学識で江戸の儒者を驚かす中井竹山（第四代学主）やその弟の履軒、さらには山片蟠桃、草間直方といった近代的英知を輩出しています。



中井竹山（なかいちくざん）*
（1730～1804）

懷徳堂百四十年の歴史の中で、最も大きな仕事をしたのは中井竹山である。竹山は、懷徳堂第二代学主中井整庵の子として享保十五年に生まれた。弟の履軒とともに五井蘭洲に師事して朱子学を学び、後に、第四代学主に就任して懷徳堂の黄金期を築いた。『非徴』『逸史』などを記す一方、天明八年（1788）、松平定信の来坂に際してその諮問に答えるなど、対外的にも大きな足跡を残した。



中井履軒（なかいりけん）*
（1732～1817）

懷徳堂で最も多くの研究業績を残した。履軒は中井整庵の第二子。竹山の二歳下の弟。懷徳堂内で生まれ、兄竹山とともに五井蘭洲に朱子学を学んだ。兄の竹山が懷徳堂学主として活躍したのに対し、履軒は後に懷徳堂を離れて私塾水哉館（すいさいかん）を開き、そこで

膨大な経学研究（中国の儒教經典についての高度な研究）を残した。その研究は、脱神話、脱権威の批判的実証的精神に貫かれており、富永仲基・山片蟠桃らとともに近代的英知の先駆けであると評価される。自然科学にも優れた業績をあげ、人体解剖図説『越俎弄筆』や天体模型「天図」「方図」などを残した。



『非徴（ひちょう）』**

中井竹山の主著で、荻生徂徠の『論語徴』を批判した『論語』注釈書。「非徴」とは、徂徠の『論語徴』を「非」難するという意味である。その基本的姿勢は、荻生徂徠批判で一貫しており、例えば、「総非」という総論では、徂徠の学問の弊害が「名」をあげることにつとめるという尊大な態度にあると指摘している。



『越俎弄筆（えっそうろうひつ）』**

中井履軒の医学書。履軒は、天文学者・医学者の麻田剛立が獣体解剖を行い、人体との対象確認を行ったのに立ち会ったという。本書の成立は、安永二年（1773）三月。それは、前野良沢・杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年のことであった。



天図（木製）*

中井履軒が作成した木製回転式の世界模型。太陽が図の中心にあるので、一見、地動説に基づいて作成されているかのようであるが、実際に中央の赤い円盤を回転させると、回転盤の支点が地球にあるため、すべての天体が地球を中心として回転することがわかる。現在の地動説・天動説という枠組みから言えば、この天体模型は、二つの説を折衷したような形になっている。



『七経逢原（しちけいほうげん）』**

中井履軒の約三十年にわたる経書（中国の儒教經典）研究を集大成した書。「七経」とは、中国の代表的な儒教經典である『周易』『書経』『詩経』など七つの経書を指す。「逢原」とは、『孟子』離婁篇下の「其の原（みなもと）に逢う」にちなみ、真の原義にたどり着くという意味である。

本特集で使用している資料の提供元

* 懷徳堂研究センター／** 総合図書館／***（財）懷徳堂記念会



WEB 懐徳堂

懐徳堂の総合研究サイト (http://kaitokudo.jp/)。ここでは、懐徳堂資料の全容を検索できる「懐徳堂文庫電子図書目録」や貴重資料の画像・解説を掲載した「貴重資料データベース」がある。

現代も大阪に息づく懐徳堂

このように、懐徳堂は自由闊達な教育機関であり、また高度な研究組織でもあったのです。明治2年に一旦閉校となった懐徳堂は、明治時代後半の復興運動を経て、大正5年に再建されます（これを重建懐徳堂といいます）。これもまた、大阪の市民大学として親しまれました。昭和20年の大阪大空襲で講堂が焼失したのち、残された3万6千点の貴重資料が昭和24年に一括して大阪大学に寄贈されます（これを懐徳堂文庫と呼びます）。二度の歴史の断絶を経て、懐徳堂と大阪大学とが運命的な出会いをはたしたのです。ここに、懐徳堂は、適塾とともに、阪大の精神的源流と位置づけられました。

その後、大阪大学は、この懐徳堂の歴史を継承していくことになります。

一つは、一般財団法人懐徳堂記念会との共催による公開講座です。阪大に懐徳堂文庫が寄贈がされたのを記念して、毎年春と秋に開催される連続講座「春秋講座」は、すでに130回を超えています。江戸時代の懐徳堂や重建懐徳堂の雰囲気や今に残す「古典講座」も、中国や日本の古典を中心に、市民の学びの場、生涯学習の場として好評を博しています。

もう一つは、懐徳堂文庫の修復作業です。なにせ今から200年以上前の貴重資料を多数含んでいるのです。資料の劣化は防ぎようがありません。

そこで、最重要の資料から優先順位を付けて、平成17年頃から順次、資料の修復に取り組んでいます。その結果、たとえば、これまでその図柄がはっきりとしなかった屏風絵がよみがえり、その画題が解明されたという大発見もありました。資料は保存するだけではなく、時代とともに適切な修復も必要なのです。

そして第三は、デジタルアーカイブ事業です。懐徳堂文庫を図書館に保管しておくだけでは、その魅力が多くの人に伝わりません。そこで、文学研究科では、平成21年に懐徳堂研究センターを設置し、資料のデジタルアーカイブを進めることとしました。その成果は、順次、懐徳堂研究の総合サイト「WEB懐徳堂 http://kaitokudo.jp/」で公開しています。これにより、懐徳堂の歴史と資料は、広く国内外に知られるところとなり、近年、中国・台湾・韓国などからの研究者・民間団体の視察が相次いでいます。適塾に比べて知名度の低かった懐徳堂ですが、一気に世界的な認知を得ることとなったのです。

来年、平成28年は、重建懐徳堂が竣工してからちょうど100年の節目の年にあたります。この記念すべき年に向けて、学内で今、大きな計画が動いています。それは、総合学術博物館（修学館）での「懐徳堂展」の開催です。普段は総合図書館の奥深くに保管されている貴重資料が公開されるのです。この展覧会を通して、懐徳堂の精神を今一度体感してみたいものです。



懐徳堂印章展示

懐徳堂文庫には、200を超える印章とその印譜が残っています。江戸時代の印章がこのように数多くまとって残っているのは、稀有な例でしょう。この電子展示では、その中から15点を選び、公開しています。これまで、印章資料が公開されるという場合、ほとんどはその印面が紹介されるにすぎませんでした。そこでこの電子展示では、印の全体を閲覧することができるように配慮しました。特に、3D画像では、印をマウス操作で回転させ、あらゆる角度から確認することができます。もちろん印面についても、「押印」ボタンをクリックすることによって鮮明な画像をみることができます。印章という小宇宙に刻まれた懐徳堂の精神をご覧ください。



懐徳堂学舎の変遷

懐徳堂文庫に保管されている各時代の学舎の図面を、Web懐徳堂で閲覧することができます。



聖賢扇（せいけんおうぎ）

中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたえて面白く評を加えたもの。原本は失われて存しないが、文政3年（1820）に履軒の子袖園が写したものが残されており、その扇面の記載は、『懐徳』17号付録の吉田鋭雄（はやお）「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」に翻刻されている。Web上で修復された姿を詳しく見ることができる。（出典：WEB懐徳堂・電子閲覧室）



懐徳堂関連の書籍等

現在、文学研究科や懐徳堂研究センターを中心に発行されている報告書や広報媒体。

【執筆者プロフィール】

湯浅邦弘（ゆあさ・くにひろ）

1957年島根県出雲市生まれ。文学研究科教授。博士（文学）。専門は中国思想史。著書は、『懐徳堂事典』『懐徳堂の歴史を読む』（いずれも大阪大学出版会）、『論語』『諸子百家』（いずれも中公新書）、『入門 老荘思想』『軍国日本と『孫子』』（いずれもちくま新書）、『孫子・三十六計』『菜根譚』（いずれも角川ソフィア文庫）など多数。2013年度「中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会」において、「優秀学術論文賞」受賞。



Learn
about
KAITOKUDO

懐徳堂の謎を知る。

江戸時代の大坂の学校「懐徳堂」。当時の学びの場はどのようなものだったのでしょうか？
また同時代に物理的にもほど近い場所に誕生していた適塾との接点があったのでしょうか？
大学で過ごす私たちにも身近な「学校」という視点で懐徳堂にまつわる人々の暮らしぶり・学びの文化に迫ります。

※湯浅教授の「懐徳堂の歴史を読む（大阪大学出版会）」に掲載されている懐徳堂問答集から抜粋して掲載しています。

Q1

懐徳堂の受講生数は？

懐徳堂には、残念ながら歴代受講生の名簿は残っていません。しかし、享保十一年（1726年）10月5日初代学主三宅石庵の記念講義を聴講した人の名簿が「浪華学問所懐徳堂開講会徒」に残っており、当日の受講生78名の姓名が確認できます。

Q2

授業は何時間？

懐徳堂の授業は相当に厳しく、特に中井竹山が学主に就任した天明二年（1782年）以降では、休日は毎月の五十日（ごとび、五と十のつく日）だけだったそうです。朱子学を中心とした講義のほかにも、同志会や詩会などの受講生の自主的な学習会があったようです。

Q3

受講生の遅刻・早退は許された？

創建時の懐徳堂の玄関には、今の学則に当たる「壁書」三条が掲げられていたようです。それによると、やむを得ぬ用事があれば、講義の途中でも退出してもよいとされ、また席次についても、武家方は一応上座とするが、講義開始後に出席した場合は、武家方と町人の区別はないとありました。町人の学校、懐徳堂ならではの規定です。



木司令（もくしれい）*
椗製の柝（ひょうしぎ）で、開講を告げる合図として用いられた。表面に記された「司令」とは指揮・監督の意。

Q4

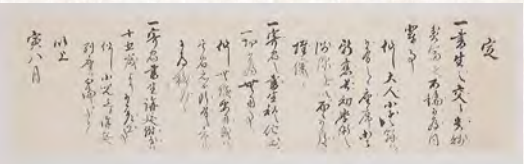
懐徳堂教授の収入は？

講義に対する受講生の謝礼（授業料）は、次のように定められていたようです。

「各々分限（身分や経済力）に応じて行えばよいが、それでは自然と割高になり、貧しい者が出席しづらくなるであろうから、五節句ごとに「銀一匁」または「二匁」とし、講師方への個別の謝礼は無用とすること、また礼をつくし気持ちを表して出席するのが第一であるから、貧しい者はその規定にとらわれず、「紙一折」または「筆一対」でもよいこととする。」かなり緩やかな学費納入制度です。

だから、懐徳堂教授たちの生計は苦しかったようです。

第四代学主・中井竹山に、壮年期の貧苦を詠じたとされる「十無の詩」という詩があります。「家に産無し」「衣に副無し」「親に奉無し」「婦に閑無し」「囊に金無し」「廩に米無し」「食に肉無し」「出に輿無し」「樽に酒無し」「門に轍無し」と詠いました。大変さが滲み出ています。



宝暦八年定書（ほうれきはちねんさだめがき）*
懐徳堂に寄宿していた学生を対象として学寮に掲示された定書（さだめがき）。今の学則にあたる。宝暦八年（1758）に制定された。懐徳堂の基本精神を端的に表明するものである。全三条からなり、第一条は、懐徳堂の書生間の交わりについて、貴賤貧富を問わず同輩だとしている。ただし、大人と子供の区別はあり、また、座席については、新旧（新参か古参か）、長幼、学問の進度によって、互いに譲り合うこととしている。第二条は、寄宿生について、私事による外出は認めないが、やむを得ぬ用事やその宿先（勤務先・実家など）から断りがあった場合は例外としている。第三条は、同じく寄宿生について、その謝礼は十五歳から納めることと規定する。

Q5

懐徳堂と適塾に接点があったのか？

懐徳堂があった尼崎町一丁目（現在の大阪市中央区今橋三丁目）と、緒方洪庵の適塾があった過書町（現在の北浜三丁目）とはわずか200メートルほどしか離れていません。ただ、懐徳堂は伝統的な中国の古典を中心とする漢学塾、適塾はオランダ語を通じて最新の西洋近代科学を学ぼうとする蘭学塾であり、学問的にはまったく交流がなかったようです。

ところが、嘉永七年（1854年）九月、ロシアの海軍中将ブチャーチン率いる軍艦ディアナ号が大阪湾の天保山沖に進入した際、この両者が不思議な出会いをしていた可能性があります。

異国船の来航について何の予告も受けていなかった大坂は大混乱に陥り、大坂城代、両町奉行はその対応に追われました。その当時、異国との交渉には第一外国語であるオランダ語が使われました。そこで、このロシア側との交渉に際しても、オランダ語に通じた適塾の塾生が動員されました。

一方、交渉には漢文による筆談も行われ、外交文書の内の一通は必ず漢文によって作成されることになっていました。このディアナ号来航の際にも、懐徳堂の並河寒泉と中井桐園が、奉行所の命により、漢文による筆談に備えて天保山に詰めていたのです。

懐徳堂と適塾は、異国船の来坂という幕末の大事件に際して、天保山での出会いを果たしていた、かもしれません。



上：焼失前の重建懐徳堂***
下：適塾（大阪・中之島）

Q6

懐徳堂は空襲で焼失したのに大量の資料が残ったのは何故？

大正五年（1916年）に再建された懐徳堂は、増改築され、鉄筋コンクリート造り3階建ての書庫・研究室棟が増設されました。昭和二十年（1945年）の大阪大空襲により、木造の講堂と別棟の事務所は焼失しましたが、この書庫・研究室棟は焼け残りました。

ただ、当時の大阪で、焼け残った蔵や鉄筋コンクリート造りの建物も、空襲後に突如炎上したケースがあったといいます。それは、高温となっている蔵や部屋を急に開き、そこに大量の空気が流入することによって起こる、いわゆるバックドラフト現象によって一気に燃え上がったと考えられます。

懐徳堂には、このことに知恵の回る人がいて、十分な冷却時間をおいてから書庫を開いたため、書庫内の資料は災禍を免れました。当時、三万六千点に及ぶとされた懐徳堂の資料は、こうして奇跡的に守られました。



重建懐徳堂の書庫・研究室棟***

Q7

懐徳堂の跡地は今どうなっているの？

江戸時代の旧懐徳堂が閉校となった明治二年（1869年）12月25日、最後の教授並河寒泉は中井一家とともに学舎を退去しました。その敷地・建物は、油掛町の質屋である天満屋善九郎に金三百両で売却されます。

数年間は、元の形のままで空室となっていましたが、その後、さらに譲渡されたことにより、門壁は取り壊されて長屋が建造され、講堂などの大きな部屋はそのままの形で借家に転用。さらにその後、建物すべてが取り壊され、明治の末には煉瓦造りの建物が建造され、旧事の面影は失われました。



大正七年（1918年）、重建懐徳堂の竣工を記念して、その跡地（現在の大阪市中央区今橋三丁目、日本生命本社ビル南側壁面）に懐徳堂旧趾碑は埋め込まれ、現在もその姿をみることができます。

懐徳堂旧趾碑
（大阪・中之島）